小精廬日誌

昭和十一年
七月以降

特別
14
1919
624

176883

小精廬日誌

七月

十九日

晴、七時の校会に臨み九時十分上野発
汽車に乗り同行松井松末石塚、十一時前
まで会堂に入り、校長に奉けて談笑、夫上之添
味掬すべし、一時頃やむを撮り三時半去
るに着す四五の校友出迎へ停車場前の
茶屋に投ず、今朝先輩の山本(忠興)島

38- 9412

田（春一）二戦後、講演中、又余の旅館へ来訪の校友に接す、ちつぶの男（高き不良）
なり此の日、午後、五時、校友八名に陪し、
常盤楼、今宵また来会六十名、余、感ずる
宴席を移す、余席上、ちつぶ田厳、話を試む
五七の校友と共に宴飲、十時、旅館に帰る、
こゝ、時、拍手喝采、時を移し、十二時、寝に就
く、今夜、山本、松本、士毛、ゆくり、島田、止
まる、明日、行を約す、島田、早大出
身なり、洋行、夫迄、島田三郎
を考へ、とす、島田三郎

榛原製

の長子也、余、先代と親しく、接し、
睡を得ず、早く、天明に至る、北の海、世界の絶景
を四五の校友と共に、
二十日
晴、今朝、冷気、人を襲ふ、早起、島田孝一（校
友）、訪、余と拍手喝采を、時、即一帳を拍手
して共に、庭、井垣次、松川本四郎、川上法勇等
来訪、九時、四十五分、汽車に、新潟に、向
島の、松井邸に、十一時、新潟、着、
石塚校長に、面、旅館に入る、午後、

後一浴、寄来文祇宮より来る、数枚
撮影、不出と托するも池袋山陽を雖波到手
入寄来、行西の接友十数に招うん、夕刻銘茶
屋に赴く、席上扇面色紙揮毫、宴席
例の如く活気漲り、病代を忘れ九時過帰
して帰京の途に就く、寄宿列車接友皆俗
乗俗之見送に来る、今夜熟睡、夢醒ん
ば既に大宮驛に達す、六時四十五分上野着
直に帰宅

榛原製

二十一日

晴、東京、午後防空訓練あり、銚子の今
津徳兵衛の許へ、北人吉田左右の用達、徳世
話し好人也、五柏海の里の宮浦此の部列る内
茂久宮より来書、十一時先を伴ひ房州数の
風月堂を始め浦賀午睡後の
中の瀬戸石を補へ、大浜吉田祥三郎氏
徳潮鉄業株別荘を宮本来る、下町人
迎之、夜来客吉の為の献盃

二十二日

晴、銚子の今津徳兵衛死去ス、弔状を送ル、松川第四号ニ掛ル、新潟法友ヨリ嘱ノ扇子六本、帳押、毫成ス、新潟法友ヨリ掛物ヲ送ル、立川佑吉ヨリ香魚ヲ贈リ来ル、松浜屋ノ洋人芝集ノ小品陳列ヲ又ハ金ヲ回収味ヲ求ル芝集品ニ貴重ノモノ多シ、高野屋金吾ニ酒飯ヲ饗ス、遠信者ノ名文ヲ以テ来書、ヲ花法友習ヲ敵機襲来防戦十時ノ刻ヲ止ム

榛原製

二十三日

晴、朝来拝祝ヲ奉ス、高橋邦[illegible]死去、去四月人事法、日高信俊今社ヲ長ス、更ニ[illegible]の推移ヲ詳細法ヲ考ル、松川第四号ニ廣井重次ヨリ来書、午後一時ヨリ防空法習ヲ始ル、敵機ヲ[illegible]ヲ天北[illegible]ヲ花ヲ入ル敵機の襲来ヲ告ル、敵ハ新潟ヲ[illegible]ク切ヲウジオヲ[illegible]ル、十時襲撃ヲ解ク

二十四日

今朝拂暁西方の空に中敵機数台余の家屋を
を通き廻旋し去る、サイレン鳴り方射
砲となる、今朝も亦同様防空演習あり
大坂支部部員より電話あり前時勘一郎より
来書、支部委員日活生命社会就任のつき来る
東活委員に問う旅費を送る、午後拝宮十数
紙成る、文養春秋社より稿料十二円到来、午後散策
丸じんへ杖を買へ、帰来赤拝宮、暮近の為夜
皆を名人

榛原製

二十五日

晴、山田清心来る模山会一行山陽方面を
ちまう鉄道を求む、東活会員来る、於紙
を著す、紙清の次第右方下駄屋根形人を
生し不快云々、市役所十一年度
下の方法方書人員後本年七十一四名
十六歳の徴兵検査を上空公園の里廟迎け
出し、附近の聚さい敬礼状を為す十時合
終りて漸やく穏に帰宅、東活委員不紀
玉郎来稿物を送る

二十六日　日

晴、朝来雑煮を業す、十時迄を仕事、白米屋の祭祝儀の刑事陳列をみる、又夜酒の[illegible]長親を見、高橋屋会堂と酒飲し七時半、市家より帰宅、給与五円来る、五十銭、郵便来る七十銭、同九十銭足金あり、黒三郎清代父流助ふたり男の事すつき来書、内子急性腸加大呪：因れも、夜に入り快、

二十七日

晴、月末に納租を完了する、五十円四十六銭（所得税府税宅地税）十八円九十六銭（一雪氏借）七十四円（三代の改良費未年度負債金）合計二百四十四円、実也、土田義夫来る、投函、黒三郎宛、心配去る、日出、吊状を受、附属二十二円入書状市場鉄大平、投書状満寿屋、揮毫を投郵、十時半出迄、所右三福に酒飲し、帰宅、村山[illegible]、[illegible]書簡の影画を雷

めるを、印刷仕ず、金子元住氏も未だ印刷仕度
旨なりの所、帰中寺田治作本と余の絶筆中
「林子平」の一冊を持参し、
諸氏を訪ふ、

二十八日

晴、本間新氏の依頼で高野九十二、岡と共に出張
中山の不動を拝し上野と京成電車にて先ず
行の墓まで行きしが、先方も四五名来り
居り、大沢様の寺にて電車まで約二

榛原製

十丁程を要す、茶話の後直ち出発し、
[illegible]風月に帰り、真砂桂次郎氏来る、
本写真、猫、節状を渡す、又真砂に渡す、同氏
[illegible]新潟と連絡の余の絶筆、校正招列未

二十九日

晴、朝来同志[illegible]の余り絶筆を校正し終り
を填める形を書し印刷安く校す、[illegible]
[illegible]刻、并に[illegible]満寿
屋へ持参、二枚ワ
校訂、絶筆一冊を

為す、小田切氏より来る、午後二時寒暖九十七度無風なれども焼くがごとし、東京府農工銀行の新業務なりと合併するべき来状を送す、

三十日

明治天皇祭

時、賀金三百四十五円出す、白木屋勘定の内なり、小田切氏より社債五拾金の関係より京都元利あるを復す、松浦博六より来る、午後元なり仏国数来、松本伯爵家六四号先代二十年祭ゆえ白紙一反菓子到来、晩餐石塚三郎来る、所労の模様なり、明日五を托す、

三十一日

時、朝来新紙瓶史に投すべき新稿を筆す、昨日を移す、佐々木より出版淡善文に刊り、地不織布演を納めるる、日本橋商品会社に於て二十八年度決算利益あり、六将校の刑決す

八月

一日

晴、石割来る、来書、一九四五年の米十二回より
ムピロウ大会八回海オリムピック委員会総会
投票の結果、東京競技を制す、山田清作氏
を活躍す、投票数雑誌三票成る、東京除
外の、川崎市と合体すべき来る、鹿児
島の宮崎市、郡山市、山陽、就て来る、浅
合程二十八回総会
五十嵐氏、石合の花刈来

二日

晴、徳兼家福田家新瓶史、宇都宮
真岡より麦こがし刈来、九時半出る、堀の内
妙法寺を参し、高野長英を偲ぶ、伯来東
稲荷平を見る、伯妹ヲリンピック
富士山登り、初日の電来
清味を見る

三日

雨、朝来徳兼三四郎、家の実の記者来田

榛原製

其事は大隈侯の進言と伝し、其報告をもて出
張所の東清兵と相き金銀の件を内渡す、
関大らも来高、午後又原稿を著し、七時と
移す、今の漸く冷気を見る、かな子代も渡る
刻

四日

晴、納来発信を著す和田英も来る、西村文則
勅旨書渡辺渡、今日きく素法、花岡四五駅出
陸を行す、四税月税の内二十一円二十一銭納め

訪、往村宅へ子代一(陸田)出兵大伝)も迎後
帰宅の桜移植刻出張所へ出張す、東清兵来る
金の慰労金預けの内千五百円銀行、十一時教
第状所の三福と福島にて昼食、午後休して新
話と遊歩す、七時三移す、朝鮮活劇更迭

五日

晴、村山清雄出湯、浦島行く、西宮今治義賀
荘大中ら来る、千五百円住友半(山)文庫へ預け入
四号国分出す、白島春吾(桜芳)来談、日本大出

若八君の陸奥八郡を乗取申[illegible]
るつもり余も一郎を捕南てもの[illegible]
八郎の人ハ捕手の[illegible]力夫江参ル[illegible]
定宗中村を義[illegible]西野真次郎[illegible]一本間久
雄とも十月一杯[illegible]脱稿を要する[illegible]
陸奥草集八空[illegible]
来ら[illegible]
[illegible]大阪
の林儀三[illegible]
[illegible]一郎列来白木屋
[illegible]菊子列来

六日

時[illegible]列来[illegible]来月弥[illegible]
に琴載すべき陸奥草[illegible]大阪の林儀[illegible]
一尚を[illegible]
国文[illegible]余り「六人墨客を[illegible]内[illegible]馬琴
の八犬伝を[illegible]「お[illegible]」の一[illegible]
を掲載[illegible]ことを[illegible]即ち流す十一時出
発大阪の[illegible]西[illegible]
[illegible]来る[illegible]
今休会

七日

晴、蛇流を渡り金の滝茶屋中日記の茶
決山を見物科書く桂沢いろは沢し来る流
す閑と楽しと萩宮流を新宮を来金の新宮
ニ西き伯耆国雪車も神田ら来る、下車して上
雪ヲ刈り風月雪と午前す、驛前刈ふ、厚生閣
ちと右馬頭の滝の上照、描記来、雷鳴る
天地暗冥、不安やり行桂金の主人落田の茶屋
杖を路ク茶屋、殺金る上四九十五円納付、

八日

晴、朝来雨を蒸す、新宮線ちと博田七郎の滝
を刈る村山秋満ちと茶子を婚く来る、夜来雨、

九日

晴、朝来雨を蒸す、十一時教室大会に回
方を婚く、高野の滝の廃墟八ちもと行事と
午前ちと伯来、清、出時を移す、林蘇三ちと
来る池尾茅義の政府院雷来友對来
見を後く、金の滝茶屋と牧ち国吉郎新志刈る、

十日

佐藤翁来訪 公の佐渡紙を送ひ、夜半に目覚めて夢と覚め、
作句芳久（芝の舟竹三十六）を画伯秋月氏に送る
七郎、紙袋を花子に渡す 果物来、雑誌を送る
武蔵屋より庭木の雑草を抜く 午後驟雨去る
法師と佐人が九ビルに移る 二時半頃雷鳴雨
利子、義父が荒竹離絶の為材料 十四武
公より文付、夜半 梦覚め 吃々来訪の印
度後 記を送る

十一日

佐藤翁来訪 紙を送る、今日帝国劇場 押絵を興
行、亀山君と 海田の庭の畑を持ち来る
三輪駅 乗換、境駅を始まる 美佐古の巻
野菜を兼ねて今日三度のす、佐久芳久と
ひをなす 五郎農工新聞 ことを書く
牧業と、動業移りと合作の事に関する 夜十時
を過ぎ 御休 ラリンピックの教文 を読む

十二日

晴、村山竜一郎の訃到る、志賀直三郎来る、
共恐と称くす十時数来る、出うけ紹介の麦酒底
に一杯を仰ぎ酒を賞し物来て午睡、覚めまう
村山に帰村を告ず、四時あ田部い赴き稲吉旅
館今の日人と分て夜に入り帰宅、大浪松本正
、春風閣流を郵送す、

十三日

晴、朝来於保と書す、今朝光立川の依頼あ
行く、今日帝国ホテル来る電話掛十八日除仏

付、午後若越を買しも七八枚の原稿を書き
完成する利ちゃんに呼び石塚三郎来る昨日
の結婚問題をつき内談す、夜に入り光立川
ちゃん帰る香港を聞し来る

十四日

晴、朝来国を移場に雑誌に投稿すべき原
稿を書作して成る、三輪鄭来訪旅館
影と宮崎を訪しめも来る、出来欲を夏
訪大浪長、侍倫義の家につき協議内を終る、

安田義治より、蘭書、午後散策丸ビルヨリ
帰宅、午睡を貪り、雑誌巻
頁を投ずべき原稿を草し、心未定、柏原文
大郎死去

十五日

晴、本日三十七回忌なり、例を追へ
墳墓、新来客稀、歌作、
より投稿を需むる、文明協会より、四史四顧
芳賀吉（第二冊）到来、雑作、

[illegible]

[illegible]（第四節）の一章を投ず、訳了、新会字字数
余り多き為、新来刊の、先ず四巻し第一の孫乱
也、後七回忌、午後散策、上野桜木、
表代四十年の蔵家刻の柱の[illegible]を買ふ、伯林の
ラリンピック放送、十二時、[illegible]刊の、[illegible]を
論ずるを聞く、日本脳刊を惜す、[illegible]

十六日

晴、新来客、[illegible]を草す、坂上仁[illegible]来り

例の注射を受く、増田氏四日来訪、又三吹の来る、谷
時間一部の春琴抄を読む、午後郵便局、料屋に
四時ごはんを那須に赴く、中澤家一泊、
物を貰うて来る、入浮世絵を見て来る、晩餐、
世子と四を囲む、二三湯殿、産婦を診る、
晩餐二殺を貰ふ、夜来雨

十七日

雨、塔影社者三鈴鄭来る、深夫国の原稿を渡す、

積原製

十時数来上野社陸風会来る、伯来春陽
集を渡す、入浮世絵を見る

十八日

晴、大根屋に酒代払ひ、おき写田村壮次郎
来る、通況を聞く、原久一郎、松本西
来る、原くとトルストイの柳宗悦編の集
八谷、潤一郎の小説を読む、入浮世絵
酒屋を渡す、新宿に数来、伊藤研屋に
食事に午後を取る、伯、読書中の

大樹山桑一ヶ所より植替を願ひ来る、昨日許可

来、

十九日

晴、朝未明起を養ひ、午後殿第出立、

七時くらい、内子時雨、夜に入り雨、

中庭弁当を喫す、医を印へ診察を

乞ふ、無事百八十余部を要すと云ふ、墨化の印

刷所より回書届、直ちに発送に取掛り、

印刷来、夜に入り印刷校了、

晴、二三日来秋気強し、治療を受ける、昨日刷来

の校正刷を訂す、印刷所へ送付、主野川伝吉郎

より果物到来、市山房より同氏百科辞典第

十冊到来、伊月より冬花布を寄せ、又

入浴の風呂敷集を清水より送り、且つ旅行を兼ね

山寺三泊、後会刷、夜会刷、午後八時

材を思ひ表る、午後八時の人阿新見川

表紙出来、百枚出す（校友七）、友人朝来、之

きりに晴れを食ふ、ものい、正麗百七十五、昨

日ごとに少しく降る、疲後睡眠を得ること一時ばかり

巻中に詳しく

二十一日

晴、相来る、客人睡眠を今夜二時のみ、

今日の血圧百七十、昨夕より二分強、午後四時

九度一二の熱を発す、二度立大の蕁麻疹

と人間を侵す、三時頃迄伊月来診

二十二日

雨、朝集を作る、近刊の中央公論に載せる

る紅葉山人の日記を読む、こんな結果に信仰が出

こなく入手し難き本信仰が出

来ずしらず、金百円用ひ出す、依頼の義理、立川より

来る、彩色の朝食会の絵、代金七円郵送す

石塚三郎氏より来る日印縁談の件につき云々申越す、

仲人依頼の件つき云々申越す、

冊会を、今らしく文を作りて依頼状

更下剤二回、

夜深

二十三日

雨雪今朝暴風二回朝食を房子に供す自
夜九を覚くなり日時眠る午後漸やく快等やり
後之午後少し疲し記憶一統を喫す伊月来診内
子の血腫五十五まで降る吹合酒を痛しても麺
麭を喫す今日樺太開疏三十年の紀念日つき
うじオを抓相の訪中俳句樺太の式典後
鼻等の状景等を聴取

二十四日

時朝来雑録を書す午後散策紀性をおす
赤坂又次郎の用を命じ書を嬉び来り渡す今宵
八一ゴ来る花ゴめ日本刀の話をうじオひ聴
く

二十五日

時朝来随筆の原稿執筆を始め午後三
時まで二回十八九枚成る赤坂の国史編纂
を読む吹雪伊月診察に来る内子血腫平
常復す川瑞国者紀興市来る次ゴ来る

二十六日

午後、赤坂の岡崎氏を訪ひ、[illegible]を[illegible]

研究所の[illegible]生命[illegible]

[illegible]（本間三郎）氏を訪ひ、奥

[illegible]に返信を投ず。角谷新江[illegible]

を[illegible]す

二十七日

雨、朝未だ明を待たず、十時出発、[illegible]刊者を訪ひ

後、大津市[illegible]根[illegible]を[illegible]未だ市の[illegible]

[illegible]を求む、午後赤坂氏を訪ひ、新見祐輔

のデスレリー係を訪ひ、陸[illegible]（来月七日）[illegible]

[illegible]、山田道[illegible]死去、常根[illegible]に参る

二十八日

時、朝未だ明を待たず、川城[illegible]を[illegible]奥[illegible]

り山陽方面の[illegible]を需めんとデスレリー

係を訪ひ、内子軒[illegible]床に入らず、十一時

[illegible]芝[illegible]の三福を[illegible]す、帰宅

又、デスレリーを訪ひ、[illegible]を訪ひ

二十九日

時、朝来強雨を蓋す、預金三百十四円出し月末家用に充つ、山田伯爵家より二冊配本、午後デスレリー侍を接し、文三郎の月額交付、午後五時頃より丸ビルに到る

三十日

時、朝来強雨を蓋す、又デスレリー侍を接し、教業午後大橋氏に細事を請ひ、上田松次郎

三十一日

時、朝来強雨を蓋し、且つ接客し時を移す、午後四時半、岩田助五郎氏来る、文三郎を伴ひ来る、朝強雨降り雷鳴と云ふべし

今晩に飯し乙酉(?)、名古屋岩田助五郎より書面演一杯を贈り来る、又デスレリー侍を接し、晩間角谷郵汽来る

九月

一日

十二年前の此日大博奨南の地類聚新録の日録を作る、此夜の雨雷もなく無風に近る十日無雨を浮雲、午後数条九日九夜の物を雑色の絵の如く絵を日課とする類聚新録の要務を最早一頁既に成を心かく、朝比奈氏一二通の問を投ず、小松保孫の伊藤公直筆を接を接み多数に列る伊藤未詩、他後野志不巻出版成る婦信情報銀行会社の孫助より来書上に返所より

二日

曇天、任茶の処深川公園に問ず、半巡区役所に参る、東京府農工銀行より勧業債券と合体すべき商務局より送附の株券の受領通知来、川俣国子より鍍金を求める山陽清幡慶任と鍍金返却し畢る墓山参る、東洋汽船を定る一時半出発能活動写真を寄る、十一時半帰

菓子折を餞して帰る、伊藤公直話を
読みて時を費す、雷鳴あり一天雨を催し薄
暮し、夜に入りて雨

三日

晴、朝来随筆一篇を草す、夜、先の随筆を献
新潮社記者来訪摘録の件にて消息を寄す
郵に投す、又紅葉山人、花鳥をたずねる一稿因
言語揚句雑誌に投ずる為林家三三に校す、
三縁郵に投函、午後雑録を草し時を移

す、夜来豪雨一過、漸くにして冷を覚ゆ

四日

晴、朝来雑誌を草す、北洋会ありて来る堀谷
善四郎氏も来る、直に帰る、宅にて飲し
陰道、日十大の職員、遅月侘然退職に付
挨拶状刷る、村山謙に消息を出し
帰途一通を認めて直ちにまた出す
庭中の萩漸やく花をつけ、漸やく秋気
をおぼゆ、増田七四郎十万を訪ふ、午後散策、菓丸

ビルに到る、夜来高雲西方ヨリ来ル、日没後雨降出ル、

九日

晴、朝比奈氏一名来ル、歌金貳百目引出ス、
小林屋三二商ス、十一時出船、松浦を始メ上
野ノ松阪屋会所ニ行ス、夜人の来訪を謝ス、
夫、富山屋ヨリ出張人ニ金壱拾両ヲ渡ス、
別来、夜間石炭三分ノ一来ル、服部嘉兵衛
来言、

十日

晴、朝来雨降ル、夕谷川孫兵衛来ル、
十時出船ニ成テパートの指ス先ニ到ル、
の近義屋ヲ見、秋谷ニ三鉢を贈ル、
高橋屋ニ寄ル、大森海岸ヨリ
うを試ム二時ニ出船、夫谷川福本ニ投宿、
大津の留根ニ用紙を出ス、金の
押賃を宗ノ滋平中将中里重次の石油
政策ニ付大隈大曲田の意ニ安堵ニ
線ニ、静ニ来ル十浮家一夫ル

七日

晴、才一郎の、若干の金を預け入る、安藤德蔓
裏坂、共に若西国寺公と謝南先生を
訪ふ、金子を陸井に出す、朝より
陸養、閑耳目を教、美十枚紙成る、国公
紙を小山田の自宅、本二冊借入、仲月詩内
子血屋又来し、兎河紅葉紙の睦合れ
臨南西中一十上、森氏月博士方
田父席、下谷乃改き義、次撰公七十百三六
微雲(十四日限)刊る、

八日

晴、朝来日課の陸養、土蔵を山田氏に渡
午後七陸養の蔓化を時を移す、安藤德蔓
来の西国寺公を訪ふ、神部氏より栗を

九日

晴、西村文則文蔓表紙、雪蔓洋三を表
紙、国陸養の原稿四五枚を蔓作し、次血を怪
之を始める、新右二三の校仙を終む、伊勢丹倉
三浦し散策しける、栗井文子来る、内子血屋

雪寒に復す

十日

晴、朝来陸軍の行を心り四年三十数紙成る、余の陸軍を収めず、因者雑徳九月雑刊未直路越次ぐるを羨を聚り未だ早後陸軍の草化に没数す、幾日寒中に過を送る、四五日来の執筆すること閑耳日と為すを雑務に十数時成る

十一日

晴、中家一年法、神律の行年を心アノを補節す、稿を成を今登筆今の演法あるも作の、十時に驟雨刊る、東京文化協会の中村堂志打来、大学講を日法を陸軍主行と時を移す、四時あ田郎に別り複数人を臨み出法今とひとし

十二日

晴、朝来陸軍の稿を修す、講法法を移刊

行始二寄ル来ル横須賀の宿屋五軒ヶ舎の
陸軍ヶつきちの咲ケ来る直ちに発ス白島
有表陸軍部行の件まつき来ル午後教業
帰来又陸軍ヶ舎ヶ出ス直ちに社ヶ寄ス

十三日

晴九時ヶ発ヶ汽車ヶ乗ヶ電車ヶ乗ヶ大
仏ヶ参詣の後乗合船ヶ乗ヶ品川ヶ着ヶ寺ヶ
訪ヶ度ヶ帰ヶ途ヶ横浜ヶ寄リ駅前の茶
屋ヶ洋食ヶ食ス夜酒ヶ飲ヶ晩食の金ヶ乗ク

積原製

ル出中一刑其兄来ル報ヲ受ケ
ヶ筆ヶ時ヶ移ス文三郎ヶ

十四日

晴朝来陸軍ヶ行ヶ務ヶ終メ帰宅ス雑法瓶
史大阪瀧山良一(大阪市役所員)訪ル
来ル午後七時ヶ筆ヶ務ヶ終ヶ東京時義
新ル才百ヶ行ル金保ヶ通知ル

十五日

時、朝来陰雨の行を俟て金沢の人川上美雨
宗夏（？）杖を携へ、教業所訪客の三種を
喃す、右馬頭風最中後八月日の陰雨鳥
あり、本松紀年、又陰雨教業を兼す所
風の陰ものを後ろ午時三十人の勤
皇事跡展覧今回刷る中吉杉坂屋
七階）蒼々の微秋雲刷る

十二日

時風朝来陰雨、録す富山展らの金の投稿

榛原製

日限の今者二十数の物正招刷来直て一校し
を返す、教業上京杉坂屋公爵に伺し、午後又陰
雨を除き、二十七日早大推持を慰る所濃
夫今面切あり、夜来微雨漸やく冷気を覚ム
埴原氏夫妻代死去、

十七日

雨、朝来陰雨を除き十時長屋杉坂屋の勤皇
事跡展覧会を又丸屋家を訪ふの出
陳あり、風雨甚し午後陰し、午後又陰雨の
稿を兼作す、

十八日

時、秋冷に乗じて朝〳〵午後三時迄陸軍の稿を草し、二十枚成る。市の投稿を収めず

雑誌俗説三部到来、一部高田善次郎へ送る

白子病状漸々平穏

十九日

朝来雨、陸軍の稿を修む、陸軍大臣印刷分社株五十部を贈る、十時迄に出社の筆と酒代三十疋一時伺篠山氏と

芳華園の詩帖を持ち来る、亦陸軍の稿を修む、夜に入り三宅ヒラ氏と西園子初路経の懇話を交ぐ

二十日

雨、北海道新報社長廣井重次死去の電報到る、東京府書記工藤〳〵来問、坂本素法馬より亡兄の遺稿を寄せ来る、陸軍の稿を修む、廣井家へ弔電を発す、又川上法勝に一書を送る、故来銀六銀一元を付する旨

輪寺と云寺を訪ふ、不立門一院四天王寺
ま、石塔ありと聞の後婚ますつきの所、新宮の
杉山心花寺訪、栗蜂羊一ツ、柳原果を求ム
来ル

二十一日

雨、終の淡雪、十時教栗、後景観を賞し金田と
酒合ふ、十時、午睡一時、ゆめを絶景一篇を
得て、雲ヶ関と称する、プラウシン任酒使節歓の
の賀我後説を夜に入りて辞す、五人分酒

二十二日

晴、坂本嘉次馬に海辺を散歩、竜山寺三ツ黄
昏帰の時帳を得て、新宮の花の海を賞一
新宮大人の手前帳を出す、竜宮を訪ム
乃ち寺ヶ谷に入る、日大田を訪く、山山四其所宮
本辺、三川の作あり、青魚を浮山辺り来る
明に美世を浪曲に心一ツ人あり、高者ヶ谷
と来る

二十三日

晴、朝来陸軍の務を終て板上公義等の例の注射を受く、板口献支賜て来る、博四郎同伴し来る、午後日本橋上野之を教第し帰る、

二十四日

寒冷甚し、晴、朝来陸軍の務を終て金沢の人川上美亮来る、往年の教を始り相意を喋々す、長時日没して帰る、聖上今日北海道に行幸、戸数撃、廣井、書を郵送、町内の清掃

二十五日

晴、山田信民来る、頃刻、日本国書塚今日（十月一日）程吉人を遣つき）来る、余の陸軍出張こつき白鳥者を遣る、国書飛脚届く、安藤一郎の接伝、勝利某こつき互に

愛、午後教第終て和を
猪人に遣る、又陸軍の務を終て、長代四、大木氏
今来る、川上氏来る、夜臨時を以て一時を
起きて面を欲す漸やく眠る

一校の上京されし、牧師東洋英の金四二酒飲す、
午後昨夜の疲れを補ふ、白鳥三郎
訪ふ、[illegible]未だ来訪、清浦社より接拶金十四
到来、

二十六日

晴、朝来押毫を始め十数紙成る有信
漸やく一掃、川上法師の病状に就
て来書、新潟高等商業校三年の補に指す、
手紙を発す、早大より映画科学研究会を

淡侍内又後くの面)陸来る、東京日々記者山口
久吉来訪ホーム、うくいつに書を持て来る、
川端一馬来訪午後
某(帰途)際雨を共にして話す、午後教
徴宵豪雨つく

二十七日

雨、池永漸やく癒え、中鉢家へ手紙を発
す、曽根[illegible]を訪ふ、[illegible]
二つき石塚より訪問せらる来る、磯部屋

細川侯より其筋、来る日のホーム、ライフに投ず
べく、後書と爽慈書面の一部を得て安堵、傳
義塾大学部より出版部に一部を送る、午後教室
新宮杉山心花、押亮を送る、小切紙揮毫
夜来雨風 快晴

二十八日

風、昨夜より作持見遠の成果を携て来る、
発金三万圓出す、金庫の上に揮毫を交付
石塚より新宮より内務省縁談の事を云ふ、

榛原製

昨夜の新宮より社記者木下喜仁一行の陸
軍の批評を持ち来る、十月十日山本橋に四
友会を開くの通知来る、指令表示一切来る、
新宿三福に午餐す、晩香後池袋の移を修む
山田清兵衛来る、横山茶一帝に揮毫交付

二十九日

晴、相撲の西巻く味噌五貫目の注文はがきを出す、亀蔵三の巻の山陽小路の一軒に是
す、石割松太郎の祥瑞研究を送る、今回

市原会の幾許を拾ひ集め
て、紅葉渓劇場会の「山セミの徽章」を拾ふ
も、松山忠義氏来る、文を乞ふる月額交付数第
紙性又満得して帰る、不用海苔、銀壹印の
為替、郵便細川三六円付す

三十日

晴、朝村渡陶士の「目あきの拉致き」の批評を
草す、夢の新聞文化の木下素文と会す
ホトトギス、うイフ会ヒラ草稿を取り戻し、荒千

加筆して送る、午後散策、四千住大橋を渡り
別れ三陽亭に恰宝、慰養の為を終め夕陽に
て、今夜中秋月見、例の如く供物を献ず、伊勢銀四の
和歌の会の式をとゞオで少く

十月

一日

晴、山田法師来訪、平山堂の高野利助氏出
石伯の山人幡の毫画を持ち来る
夫白鳥青来、劉庭泰来、午後浴場

四五枚業作、石塔ニ手ヲ懸、四時春風国を撫ス
於ケル国色殺伐今の世ニ臨テ今後一回栄
地四石所の流儀ニ飲ム武田豊四郎ト共ニ来爾

二日

晴天、杉山心義方ニ赤飯ヲ送ル、伝兵衛
者急前ニ来ル十一時ニ酒ヲ出ス
酒ヲ渡ス夕の全四ト酒ヲ出ス
午後、由ヲ以テ全ニ手紙ヲ出ス
ウ、東人一ト世話ヲ、トルストイのアンナカレニナ

榛原製

下巻紙来、柏崎ヘ注文の味噌一樽、川来、九
入り南

三日

雨、朝来隠年の移を終む、高山彦九郎（生十四歳）年
但人名（十五日東京八ツ）川上美寛ヲ
来書、十二時頃到着、和り向上今の話
頃ヲ人ヲ、晴ル、八ツ村淳ト投商、ト丈時ヲ書
七十一回移支ル、午前雨ヲ午後雨降ル
和ヲ三ヲ三時ヲ風呂ヲ入ル風呂ヲ漸ク

裏山、真柴桂次郎氏宅に家を借り居る
親山来る、祇園市紋屋の志賀、文雄氏、金の徳兼
の紙屋を訪ふ、知恵袋、おめでとうございます、
一本、

四日　日

晴、朝来池善の稲を俵む、小林吉三郎堂雇
夫、清蔵、竜山春三、春琴の畑を高千穂、細川
氏、清義、武内、代二十銭、文三、島
村、二人、酒宴、三高、まして五人行うむ、
小森豊吉郎、おそい仕舞を知らせ、夫、桃、

陳原製

を注文、金四円交付、利根川徳代、八円の内
幾細川寿長、掃除、小林吉三郎、後、鞄屋の
保命酒を頂く、本志賀文雄、来る、書籍屋
理社、ふし栄の隠蓑、摘、浸蓑十本利来る
の投稿を郵送、雑誌、新、真柴桂次郎
来る、加島酒次の養父死去の報、田中
真隆（灸点医）内子の為めに灸点を施す、
竹の屋、民代、（医）、北海屋浜習代を浸し、投薬
入る、北海屋、弟、を書く、所伯三福、
酒候晩餐を食す、今日人出多く別て雑踏

五日

晴、朝来造花の稽古に行く、加島通次養父知る
うつを帰す、村山邸へ伺ひ西遠の話
書を頼まれ立ち寄る、毛織屋寄る、菓子千形頂く、早
大の大島正一来訪、午後散歩丸ビルに物を買ひ
帰る、早大後援会八幡一郎方へ寄る、

六日

晴、朝来随意の稽古を終る、直橋太洋来る来
る、石塚より、服部英の稿葉葉一を借り来る

女子拾円の山陽の詩帖を頼む、酒井谷平より
り来書渡る、無依子今日発ちとのことを
聞り来る、午後紀聖堂立時紀聖堂に到り
睦今こ話す、吉田拓郎婚田明と会す、新徳報社
より御金廿五円到来、新徳報社キンリより来る、郵
便税位上げ決定の報あり

七日

晴、関大今中林豊雄ら来る、地後保義
吉田豊吉(きい)に(き)い、

[illegible]十八日限り[illegible]の通[illegible]
[illegible]刊の[illegible]
[illegible]
[illegible]者[illegible]文人墨客[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

八日

[illegible]山[illegible]陽西[illegible]巻[illegible]

榛原製

白島[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

九日

時、朝来隠蓑の移を終む、出張部より金拾
八件まつき東清童来る、山田清
氏来る、丹吳家主黄根森吉来る、午後
隠蓑恰来京隠蓑の原稿蓑作、亭の移
稿を移めらる、図書館から雑誌刊行、注文の大
阪油一匹出来、廿二日振、清、下田歌子死去、

十日

時、朝来隠蓑の移を終む、東清童来る、余
の出張部より受くべき慰労金の内五千円

榛原製

也領収、右金行方知れの牛込文庫、預け入れ
百円受取り出し、文庫七十円六人付、日本橋区
三枝蓑、文内紙袋、すつき物を婦人
言峰氏宅へ、酒飲しも物置、京隠蓑
の原稿十枚蓑作、放送局より廿一日放送
を依頼し来る、未比諾せず、牛込区役所、維持
金、金壱千二百円、壱拾円納付、新宿石塚
三郎氏より雞卵の味噌漬を送り来る、所得
税弗二拾銭徴収列る、山本忠興の父死去、

十一日

雨、午前九時十分上野を発し紀伊路に赴く、大路正一
三郎、和田中尉、銀行常務支店長永井助義を
伴ひ来り、其の接待世話の労苦忙を又の者
妹背山中に三山閣の名称に理髪せしめ
なる化粧帳を以て昼食を玉川亭に寄消
昼の抹茶を喫し、来流の名級（前後者
壁地細刺）一双を贈る、故の献上品を
見物、滝業の稽を終り、午後上野を発し
第七時半、山口新宮つ峡着、松本長一郎来

榛原製

寝後瞑想も得ず十二時を打ち、ブルボーノ美雅俗を
積む

十二日

晴、福門タイムスの雪降り寒し大漁元気の思い
出を新しくやや三重新長野村大字毎一を
金の寺を尋ねて乃ち抽象もやや山陰の
新らしき来書、故文（前文）同じく寒し大分廿一日
庵敬医を寄せ、慰（慰）者の近接の新聞を出版
を提す、十一時教年、高野を俗す丹三

栗田来、十時ごろ微雨到る。

十三日

雨、朝来発熱を兼ず、小兵衛、高知より帰式、
来訪の人数多門前に満ちる、山陽帰るべき
筈、大坂の士林衛より松茸を送り来る。
夕方、栗田来、稲門同志の音信
命脈来る、早稲田大学鍬を贈る、
廿一日発足の筈を延ばし故郷に帰
林に訪ふと雖ども不在、理髪を新美

十四日

晴、外務八重磨清格輯二の新刻を来援、山
陽一家の書屏風十枚、貴の家合のきを云ひし也
時事新報高田の人、及び流す、冊美原
原、次男光就輯の件を由織に長崎
に渡す、栗田来、光の書状到る、永井氏

花を添へ到る、午後御面会に於ける小西氏夫妻
の生母式に臨む、谷、葉四郎に教商、如雲後藤私を
業を修間高山長房及本素次馬代吉男等
明日の紀念会を準備す、紀念品代五百円を贈
る、通相賀毋木桂吉死去、葬儀十二日

十五日

晴、冊美原平、藤波、今泉二、永井青光、杉山
心義、玉木、佐原光子、甲斐菊菊刑素、
劉應泰来訪、才一紙行支度預金百五十円引出

1 五百円預け入る、才二期不納後十八円納
内子と交付午後五時に移す、冊美と伴
谷に箭を音楽堂に於て
東京分銀に行ける高山氏創立五十年紀念の
祝宴に臨む、今夜人度会、今夜光後後
1 物之

十六日

晴、冊美と電話を交す、佐原光子に渡を送
る、九時●毋木桂吉の葬式に臨む、

墨地有の餅と冊子とを頂戴不在、山田後先を
伴なひ浅草の金田と酒宴し、昨夜後とつき先と
内淡き早大理工の部 化学実験室 設
成るつき十一月一日 拡張の拡待状到る
午後帝国劇場 別刻二到る、府税市税十一年
分後期分七十七日八十二銭の徴収到る、
家新旧仮大文字も松葉も賜り来る、

十七日　神宮参

昨、冊子を伴なひ姫路公園善四郎を訪ひ来る
来葉の冊子の表紙の紙質につき伝ふ、

榛原製

陸軍二花を姫公園に植ゑ山崎後林園に移植
植替の田舎者宮崎氏来訪十一時ゴ冊子
を伴なひ神宮三福に午餐を共にす、之も伊
也、不在中岩本森吉加藤辰沼本典一の俳句とつ
きまとる、大阪の神田吉得らと松葉を高砂
にある真珠中村屋に投函、大阪平野緑山
に投函、力子の病状と就て石河氏より来る、
つき帰宅後一件を決す、

十八日　日

時に後雨、隨筆一口を交津藩の務を同志の
今の雅話に寄す、冊子ならず書紙えせの
墨ヶ窓屋案に人を招く件こつきこうし来る
生野の陸口獻を一色と為し藩一件
こつき別紙を伺出す、十一月十日帝國議会議
今屋設立式典及祝賀会の招待状大花者
警保局賜品伺新聞を来る、数年新生
井筒と称して内天宇屋定蔵と同す、家老
の葬山本伝を寄こす、津本無一郎の
腹痛を案ず、新潟藩四福銀主に投宿、文

時大隈今朝に於ける隈つ今日時

十九日

雨、朝来津本無一の近憶を著し明を奏人
す、陸上弘昌氏と伺の注射を受く棒立七(四)
名裕度来訪、昨と津本無一伯記伺案不
の為森主家道事務雨降り無可為午後
徳色時を移す冊子を書き内閣書(未
松阿七丁目)に招ける

二十日

而、朝来津本典二一通作文を授ける。山田屋義治、
講演社の社員西井武氏来訪、「キング」壁新聞
を維新当初の紀念会たい三十一枚貸与、感激
の涙ながら来る。且お幕を携へ来る。栗羊一
母に面会を乞ふ。午後随筆の稿を整理し五
時押美の家に赴く。堀谷氏も同席、酒肴数々
頂く。

二十一日

時、永持徳一、白鳥春吾、新美良三、佐々木の社
社員後援を乞ふ。改口献金も承諾、原稿と
忙殺せらる。又講演社より公会堂見取図改
更、絵素社より随筆の寄稿を需め来る。
講演社より貸与の富士三十一枚戻し来る。歳金別
荘花岸荘村上より林檎大箱二個を送り来る。
五時半星田家と花けける早大出版部の宴会
に赴く。七時半辞去。自動車迎へに来る。
八時ちょこ十分帝国劇場今開演南部の政情
并に芸者「春」「秋」きんを本年

放送三回也

二十二日

晴、廣瀬氏、順政界往来、社入投簡、亀山事、三代
葬山本係、宮内を交付、貴族と由り福屋へ行七時
帳の通に、荒巻、十時出掛、私宅に掛を縫ひ書
終屋食事に酒飲む、夕方より茶川
福本を以つて五十円紙幣を花籠を贈る
祇園の料理四三番地大森茶屋より来簡
揮毫を求めるに、手塚弘安より中村菊蔵を贈る

二十三日

晴、朝来政界往来、投すぐに内閣廿三番の紙
送来、井上に政治十投事、此を書す、竹内尉
の所に廣井南洋山陽の寺簡の新金を
訪ふ不良也、市の投稿を初めて大阪毎日の
ライナ、に掲載、才一段り顔全面引出す
光を仕上を数年来流行観音を寄す北日
本、大阪国光新聞より年賀并に紅丸新聞集出日録
を寄せ来る、十一月三日秋季大会の案内状到る

供養する堂前菊を奏さしめ金四郎に酒
飲ましめ帰へる、和田萬吉来る、大
[illegible]の後を追うきを絶り来る、北地を降
雪寒冷骨を刺す、冬ものの如し

廿四日

晴、西田長次郎の名刺を持て見舞ひ
[illegible]る、十二支腸炎の病を罹り病苦を
[illegible]、午十八前子洋り中ごつと和田の上葬儀を
行ふと云ふ、妻と共に病状を禁し得ず、
[illegible]

榛原製

四歌の一句を政界往来社へ寄す、帝山房坂本
并に平塚弘毅と御出を待す、偶り二尾形
治雄田と浴す、時を懇談して時を費す、
太郎与来る、和田来る、[illegible]と共に
家を出て間遠巖を訪す、金中[illegible]子の酒
佛日記を[illegible]切る、

二十五日

晴、朝来陰雲、[illegible]を修する時を移す、十時元
を修する教案を[illegible]出て遠と称する

ヲ刻ス、富貴ヲ願ヘズ三樽ノ酒ヲ含
ス、物質窮乏ノ時、人ヲ傭ヒテ庭園ヲ掃除
シ花壇ヲ整理ス、露子ノ誕備ハ北ヲ
讀ム、丹呉康平氏来ル、深更激論アリ

二十六日

晴、翔来随筆ノ原稿ヲ修正シ、同書扉ノ雑誌
ニ寄セシ随筆ノ校正摺到来、一校シテ送ス、書店
ヨリ今ニテ西田ト掉尾文ヲ寄セヨト請求シ来ル
大阪毎日ヨリ寄稿謝金二十一円到来、早稲田

中学ヨリ十二月三日創立四十年式典ニ列ス、十
時此ヨリ出席ス、数葉書簡ヲ購シテ帰ル、又随
筆ノ原稿ヲ終フ、十一月一日同書発行ノ招待状到
ル、晩間石塚三郎来訪ス

二十七日

晴、翔来随筆ノ原稿ヲ終ヘ、菊ノ盆栽二盆ヲ購
ヒ、坂田誠、内田川瀬文来訪、午後荻果、白鳥
省吾ヨリ来ル、改造社ヨリ謝金四十円到
来。

二十八日

晴、銅来る田義次郎の近接文を業作す、郡役所より記名井上友一郎来り文案を調べ案の如を訪ふ、また、田村牡二郎再来、茂野も来訪、教業紙を郵送す、夜と酒後、山電後近接文を業心し成る。

二十九日

晴、郡役所より伺書を完了、徳業の稿を終る、増田七四郎来訪、来生山の物を携く来り鍬宮を求む、白鳥省吾つき金の徳業、五円

榛原製

首部と交渉す、泰東古墳陵の絵図を二部、篠田長兵衛来訪、陸口献吉と面す来る、陸口献吉と面す来る、書房ふ、徳業、第一回去江春松の自然の煉獄刑表、十後教業、鉞子の今津徒兵衛ふと来る、また又、新田の坂の献吉の出と揚す、為て来る

三十日

雨、坂田誠来訪、ふと、教金三百六十四円八生す、村山新酒来る、亀山来、三ふと宗伯の在月の

幡を称し代金貳十四挺、南山の作品不多の逸作なるつき協議数業浅学日本橋を出し一方時彦倉屋に飯す、板口献吉らと角谷の家を訪ふ、角谷書を送り来る、雅号「書肆金」の活字を任ず家花白風紅の影本を贈付、字和時の文保貢らと来る、今夜和泉山人の忌なり、丁り山岸為吉の山人を偲び敬主を叩く

三十一日

時、陶器の稿を修め、浅書留録の稿を小

榛原製

已前伊予白の島者を為す、為吉、今回百部
毎文、文さいの巻頭に「碑化」の一稿を載す、
又華山の木像を示す、宮本武蔵の肖像
原出身の貴生伊藤俊吉氏、角谷と縁
深く関し、石塚と提携、同伴するつき昨日
浅草の金田ひ教時内訪す、森一兵らと来る、
先主門の佐藤を訪ふ、文三郎、亭の宴を
設めらる、都新聞、并国之新聞社刊来る
倉田三郎死去

東京はいら

閲覧室

積原製